

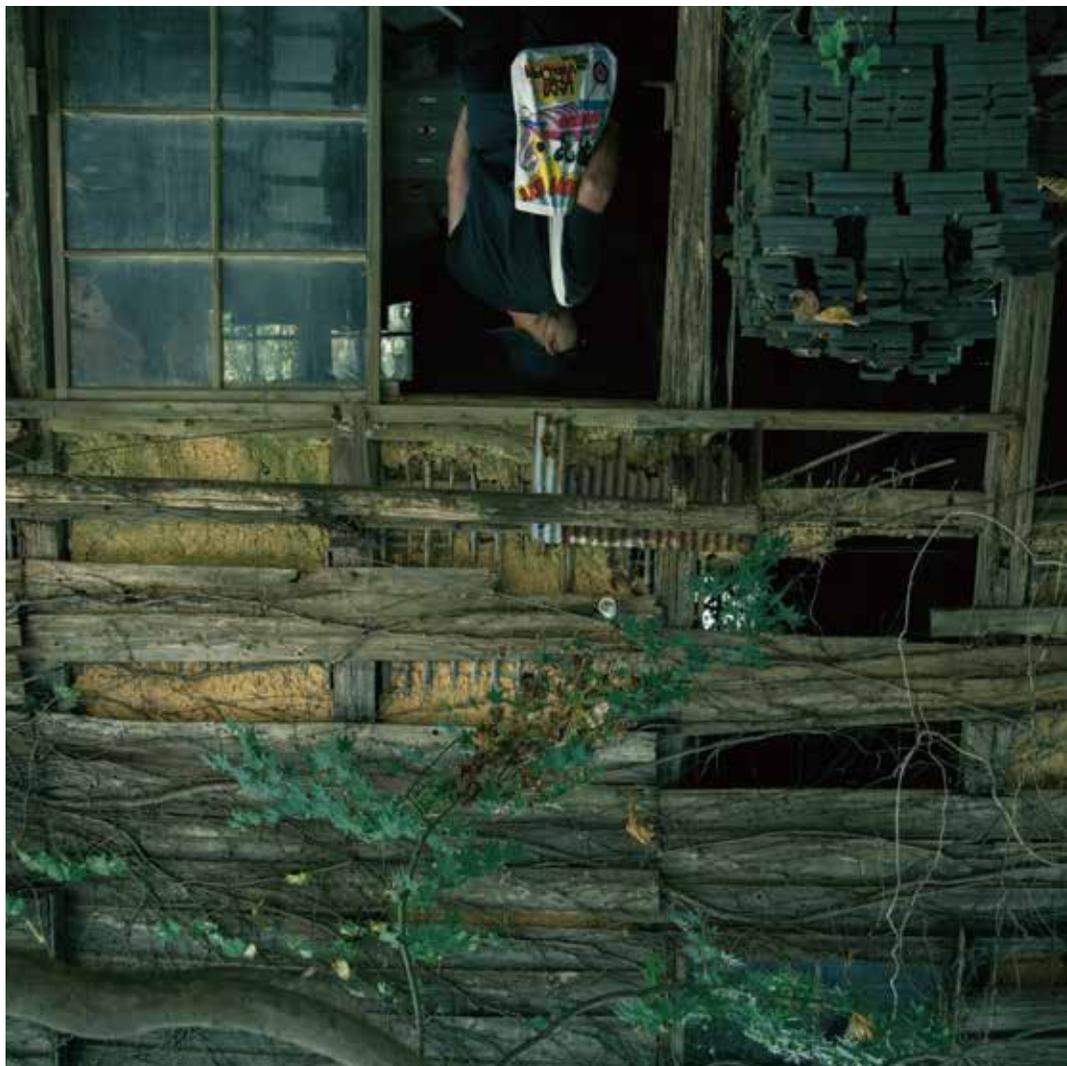
# ULTURE

FEATURE :  
THE WONDER OF TOKONAME

C SIDE



SPECIAL INTERVIEW  
大竹 伸朗  
SHINRO OHTAKE



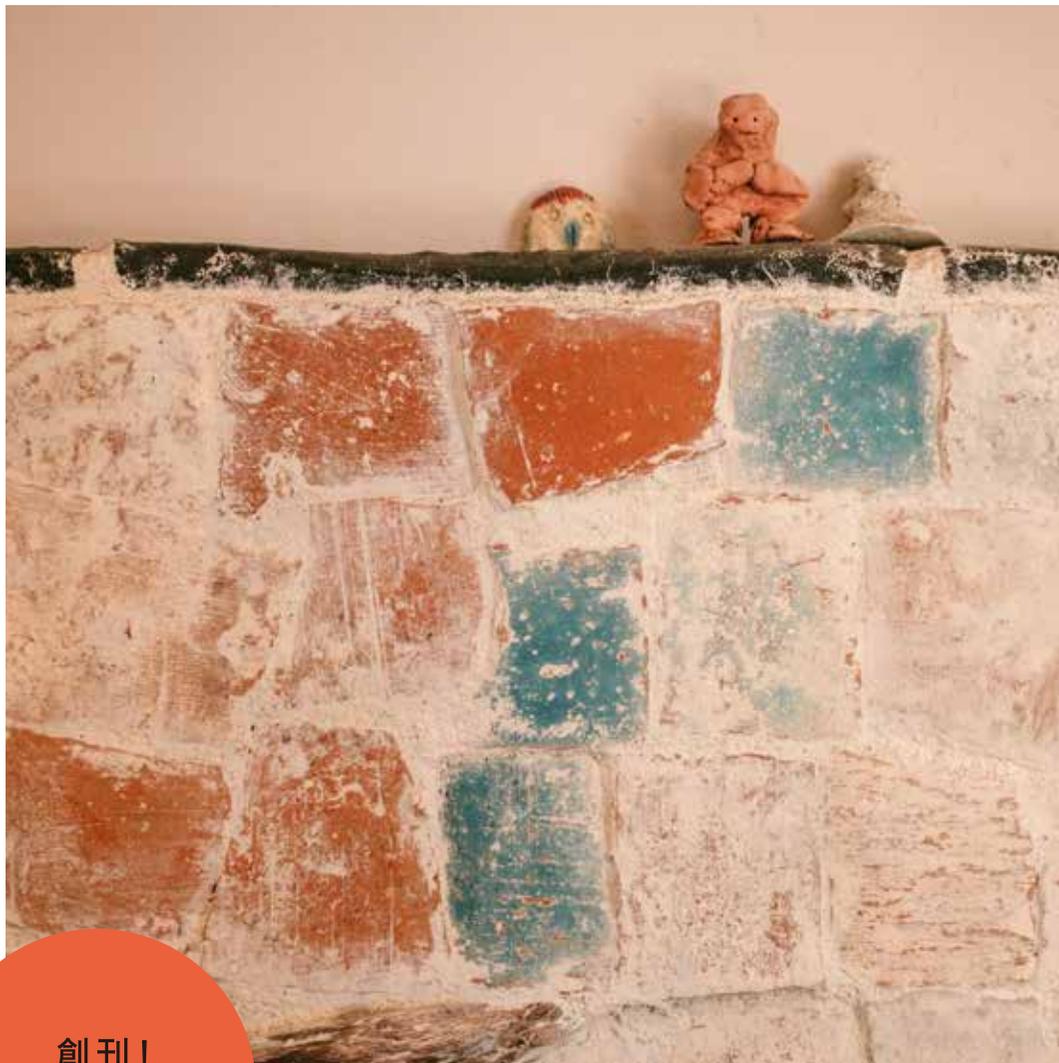
滑。常。場。磁。あ。に。こ。そ。に。た。ま。

LIVING & CULTURE  
MAGAZINE  
BY INAX MUSEUMS # 1

NOT FOR SALE

TAKE FREE

LIVING & CULTURE  
MAGAZINE  
BY INAX MUSEUMS # 1



タイルのある生活

創刊!  
FIRST ISSUE

2022 ISSUE



SIDE

L

# LIVING

FEATURE :  
LIFESTYLE WITH TILES

## はじめまして

INAXライブミュージアムより、年刊で発行していく『LIVING & CULTURE MAGAZINE BY INAX MUSEUMS』をお届けします。

この媒体を通して、当館の活動を軸に、さまざまなライフスタイルやカルチャーについて発信していきます。

本誌タイトルに掲げた「LIVING & CULTURE」は、LIXILが当館の活動を通して伝えたいキーメッセージである「LIVING CULTURE」を私たちに紐解き、切り出したテーマです。

生活の中には必ず文化があります。  
文化は生活とともに生まれます。

私たちは、常滑という風土や時間から生まれたやきものの歴史・文化だけでなく、そこを起点に現代的な観点で、「LIVING(生活)」と「CULTURE(文化)」を好奇心を持って探求し、皆さまへ発信していけたらと考えています。

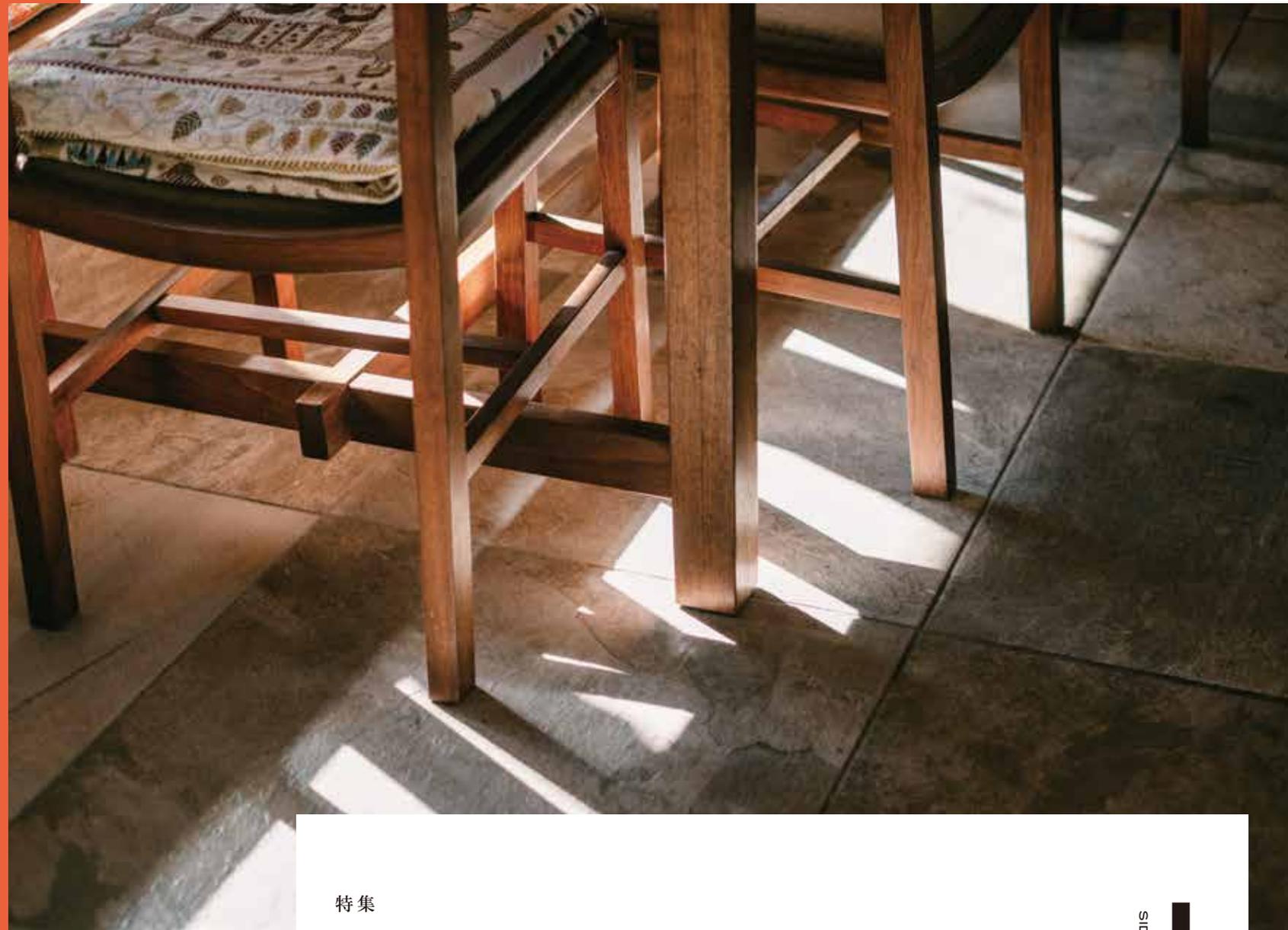
INAXライブミュージアムは、株式会社LIXILが運営する文化施設です。

本誌はSIDE:L(LIVING)とSIDE:C(CULTURE)の両面開き(両表紙)仕様となっており、それぞれのテーマに沿って編集し、本紙の内側へ読み進める形でデザインしています。INAXライブミュージアムらしい体験・体感型のマガジンです。手を動かし読み進めていく読書体験をお楽しみください。

2006年の発刊以来、長年ご愛顧いただきました『NEWS LETTER』は52号をもって終了いたしました。

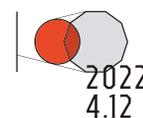
SIDE L | 表紙・扉  
撮影：藤谷有紀

SIDE C | 表紙  
撮影：対馬一宏 (TONE TONE)  
協力：東栄工業株式会社



特集

# タイル のある 生活

FEATURE:  
LIFESTYLE WITH TILESBEYOND 100 YEARS  
BEYOND TILE

このロゴマークは、2022年4月12日のタイル名称統一100周年を記念して全国タイル工業組合によって制作されました。株式会社LIXILは、日本のタイル文化の一翼を担うものとして、同組合が主催する「タイル名称統一100周年記念プロジェクト」を応援します。

<https://touchthetiles.jp/>

1922年4月12日。  
それまでのさまざまな呼称から「タイル」という名称に統一することが決まった日です。

2022年はちょうど100周年を迎える記念的な年として、全国タイル工業組合により「タイル名称統一100周年記念プロジェクト」が発足されました。

改めて私たちにとって、タイルとはどんな存在なのか？

タイルは建物の内外壁だけでなく、台所、浴室、トイレなどにも使われ、長く私たちの生活とともにあり続けています。最近ではほかの素材が使われることも多くなりましたが、改めてタイルに注目してみると、まだまだいろいろな可能性がありそうです。

時代とともにタイルの存在価値は変遷を遂げ、今もなお魅力的に輝きを見せるタイル。そこに横たわるタイルと生活、それぞれのストーリーを追いかけてみました。

SIDE: LIVING

# 特集 タイルのある生活

## LIFESTYLE WITH TILES

「タイルのある生活」を体現している住宅、書店、作家を取材。そこにはこだわりの活用法や、それぞれの物語がありました。

### EPISODE | 1

柴田雄貴・里奈夫妻



左官職人の柴田雄貴さんと、フリーランスの建築デザイナー・柴田里奈さん。里奈さんの祖父母が住んでいた家を受け継ぎ、自分たちなりにアップデートしながら、息子さんと愛猫のもんちゃんと暮らしている。

愛知 | 一宮市

## 1. タイル好きが高じたこだわりのリノベーション。

左官職人と建築デザイナーとして、ともに建築に携わる柴田夫妻。自宅に使用されたタイルや壁面の施工はどれも雄貴さんが担当。中でも1日がかかりの大仕事となったのは、リビングの壁面タイル。「もとの壁の色が暗くて、白色のタイルを張ることで、部屋を少しでも明るい印象にしたかった」という里奈さんの狙いと「あえて目地を入れず、こげ茶色のもともとの壁が見えるようにした」という雄貴さんのこだわりが活かされ、違和感なくこの家に溶け込んでいる。

キッチンのタイルはレトロな花柄をチョイス。これまで

は単色でシンプルなタイルが主流だったが、最近では柄物やカラフルなタイルが再び人気なのだろう。「私自身、こういったレトロなタイルが好きで、小さい頃から、タイルを拾ったり、もらったりしては宝箱に入れて集めていました。タイルは内装デザインの仕上げで使う選択肢の一つでしかないかもしれませんが、私は常にどこにどんなタイルを使うかを考えながら、設計をしています(笑)」と里奈さん。「デザインした部屋を見てもらったとき、お客さんから『タイルの使い方がいい』ってって言ってもらえるとうれしいですね」。

築60年以上の古い家ならではの趣あり。

●花柄のモザイクタイルは目地付きのシートタイプのもの。施工も簡単なのでオススメだそう。●雄貴さんが張った、腰壁の白いタイル。●トイレの壁に張られた白のモザイクタイルは、ここがもともと風呂場だった名残りのようだそう。●窓際にもキッチンと同じ花柄のタイルを使用。現在では貴重なレトロなガラスとも相性良い。●タイルに魅了されてきた、里奈さんのこだわりが詰まった施工事例。

### 柴田さん こだわりのタイル



取材・文・撮影：藤谷有紀



## 2.

### EPISODE | 2

加藤貴也・有子夫妻

## 物語の詰まったタイルが呼吸する家。

焼き窯を作る仕事をしながら、作家のマグカップを専門に取り扱う「tsukasa wonder mug」を企画・運営する貴也さん。生活工芸品を集めた店「ハナタロウ商店」を多治見市内で営んでいる有子さん。

岐阜 | 多治見市



タイル生産量日本一を誇る岐阜県多治見市。このまちでやきものの焼成窯を製造する家業を継いだ加藤貴也さんは、妻の有子さんと3人のお子さんとともに暮らしている。

キッチンとリビングに張られた特徴的なタイルは、装飾壁面作家・繁田至啓さんによるデザイン。またキッチンの床には、タイルの加工工場で働く友人から譲り受けた大判のものを活用。この家の至るところに、ものづくりに携わる人たちとの繋がりが刻まれている。

築師の貴也さんのもう一つの顔である、マグカップ専門店「tsukasa wonder mug」。その活動の一環として、取り扱い作家へのインタビューを自ら行ってきた。「作品を取り扱う上で、その作家について語れなくては」。窯は納品後、約10年は問題なく使えるため、電熱線張替えの時期が来るまでかなり長い時間が空いてしまう。「何より作家さんとの関係性が薄れてしまうのが嫌でした」と貴也さん。作風だけでなく、人となりにまで丁寧寄り添おうとする姿勢が、作り手たちとの良好な関係を築いてきたと言えるだろう。



多治見駅近くに設置されている、『キン肉マン』のキャラクター『タイルマン』等身大像。「この製作をきっかけに、タイルに興味を持った」と貴也さん。

### 加藤さん こだわりのタイル



●●キッチンの壁面は、あえて不規則なデザインにしたいと加藤さんたちが繁田さんにリクエストし試行錯誤の末、完成した。●●暖炉のタイルも繁田さんの力作。泊まりこみで割付からタイル張りまで全て行った。●こちらは外観。奥には庭があり、自作のピザ窯と物置小屋も。●タイル張りの床は夏はひんやりと、冬は暖炉の熱が伝わって暖かくなる。●タイルを加工する工場の友人からもらった1辺が1mほどある大きなタイル。

# 3.

EPISODE | 3

## TOUTEN BOOKSTORE

愛知 | 名古屋市

どこか  
懐かしくて、温かい  
タイル張りのカウンター。



INFO.  
TOUTEN BOOKSTORE  
愛知県名古屋市熱田区  
沢上1-6-9  
営業時間 / 8:30~18:00  
(土・祝 10:00~ 金曜 ~21:00)  
日曜定休



目印となる印象的なロゴは、看板屋「看太郎」グラフィックデザイナーの廣田碧さんが手描きで制作。

金山総合駅から徒歩10分ほど。昭和レトロな沢上商店街にある本屋には、20~30代を中心に、小さな子どもからシニアまで幅広い客層がやって来る。ガラス扉を開くと、薄鼠色のタイルが張られたコーヒーカウンターで、店主の古賀詩穂さんが迎えてくれ、挨拶や会話を交わすのが日常の光景だ。

このタイルは、空き家を店舗に改装する際に、名古屋のデザイン事務所からグッドタイミングで紹介を受けて採用。多治見の「モザイクタイルミュージアム」に見学に行き、たくさんのケーススタディの中から迷いながら、店のイメージを膨らませて選んだ。「今はタイル張りの家が少ないですが、ミュージアムの展示室で昔の写真を見たら、色や柄を考えるのがすごく豊かだと思って。画像

検索をしたり、施工事例を調べたりして、銭湯や学校の手洗い場にも使われているパブリックなイメージのものに決めました。本は背表紙の色が多いので、落ち着く効果がありますね。タイルを張る作業は、多治見の職人と一緒に古賀さんも参加し、2日間のDIYで完成した。

「毎日カウンターに立っただけでも飽きないし、この空間にいて気持ちいいです」。店名に込められた古賀さんの理想は、「文章を整理したり、息つぎしたり、時にはアクセントとして使われる、生活の中の『読点』=『、』みたいな本屋」。築50年の建物の素材感を生かした店内に温かみを添えるタイルは、本屋で過ごす余白のひとつときをさりげなく演出してくれる。

①愛知県名古屋市生まれの橋本亮二さん主宰「十七時退社社」のブックフェアや、選挙期間中は政治がテーマの選書&トークイベントも開催 ②あいち認証材で作られた本棚。雑誌・コミック、新刊、暮らし、社会、学術系、詩歌…と文脈ごとに3000冊が並び、奥には絵本スペースも。③2Fギャラリースペースでは、月1回ペースで企画展を実施。春には、京都の都湯を舞台にした、スラックさんの漫画『みゃーこ湯のトタンくん』の原画展を予定している。④光との相性が良いタイルは明るく照らされると、陰影のニュアンスが生まれる。「朝が似合うお店にしたかったので、気に入っています」。



# 4.

EPISODE | 4

## 10) Questions and Answers Interview with guse ars

海岸に打ち上げられた陶片に残っている模様を作品へと昇華する、斬新な発想から美しい意匠を生み出す2人組のアーティスト・guse ars。彼らはなぜ「タイル」という表現媒体に行き着いたのか？そこにある思いとは？10の質問から紐解いてみよう。

陶片から生み出される、唯一無二のアートピース。

取材・文: 武部敬博 (LIVRARY) | 写真撮影: 村瀬美希

Q1. 昨日は何をしていましたか？

A1. 一日雨降りだったので、コラージュや立体作品になる素材、古紙や木片などのガラクタを整理していました。観葉植物の手入れなんかもしましたね。

Q2. guse arsという作家名は、人間の「癖」と「ars(=芸術、技術、手仕事の意)」を掛け合わせた造語だそうですが、どうしてこの名前に行き着いたのでしょうか？

A2. 私たちの作品づくりは、偶然な素材との出会いから始まります。そこに自分たちのあらゆる癖を加えていくことでオリジナルの作品が生まれると思っています。自らの手で「guse arsの癖」を入れるという意味を込めて、この名前に行き着きました。また、一見、何語なのか意味もよく分からないという点も重要でした。

Q3. 陶片を拾い、そこから新たなデザインを作り上げるというアイデアはどんなきっかけで生まれたのでしょうか？

A3. 鎌倉の海に遊びに行った際に、ビーチコーミング(海岸などに打ち上げられた漂着物を収集の対象にした観察したりする行為)をしました。その時に、貝やビーチグラス、流木などに混じって、いくつかの陶磁器の欠片もありました。ある陶片を見た時に、柄の残り方、切り取られ方にとっても惹きつけられました。欠片の先の模様は分からないが、要素が一つであれば、その繰り返し方でオリジナルの模様を生み出すことができる、というのが考えの発端でした。

Q4. タイルを拾い集める行為については、必死にハントする感じなのか？本当に偶然拾う感じなのか？どちらでしょうか？

A4. 両方の感覚があります。宝探しのような遊びの延長で気楽な気持ちで拾い始めるのですが、自然と必死にハントする感じに変わっていきます。砂や小石をずっと見ているので目も首も知らないうちに疲れます。また、普段行かない場所に旅行する時などは、ついでに拾える場所がないかを確認しています。

Q5. 偶然性の強い作風だからこそ面白い(ご自身にとっても、作品自体についても)のだと思

いますが、なぜ「タイル」なのか？が気になりました。もともとタイルというものに興味があったのでしょうか。

A5. 一番は割れるという点です。捨てることも偶然ですが、人が器やタイルを使用して割れてしまうことも偶然ですし、その時の割れ方も操作できない、即ち偶然です。また、自然界にある素材が焼かれることにより永遠に残るものになる点も重要です。いくつもの偶然が重なるのは、割れても永遠に残る陶磁器という素材ならはだと考えています。繰り返し配置して使うという点ではタイルも四角い欠片だと思います。これが未来に再び割れて欠片になる可能性を作ることがguse arsの表現の一部となるので、「タイル」という形で残すことに意味がありました。

Q6. 制作上、どんな風に二人で役割分担しているのでしょうか？ぶつかり合うこともありますか？

A6. 基本的には全ての作業を二人で行いますが、グラフィック周りは村橋、ドローイング関係は岩瀬と明確に分けている部分もあります。guse arsでは、お互いの表現が重なる部分を優先して作品づくりをしているため、大きくぶつかり合うことはありません。小さいぶつかりはちろんありますよ。

Q7. 尊敬するアーティスト、または影響を受けているアーティストについて教えてください。

A7. 二人の好みは近く、ミヒャエル・ボレマンズ、リュック・タイムズ、マンマ・アンダーソンなど欧州に好きな画家が多いです。またヨーゼフ・ボイスの作品形態や素材の選択、プランクシーやハンス・アルプなどの彫刻も好きです。

Q8. 仕事とアーティスト活動は分けて考えていますか？

A8. グラフィックの仕事は比重が小さいのですが、ほとんどは作品表現の延長線上にあるものです。我々の作品自体を絡めたデザイン、またguse arsが作成している作品冊子を参考にいただくデザイン依頼がほとんどです。

Q9. 活動や表現においてこれだけは譲れないこだわりはありますか？

A9. 言葉にするのが難しい部分が特に重要だと考え、それを二人で共有する事を大切にしています。どのような雰囲気や印象にしたいのか、それがguse arsの癖を出すことに繋がっていると思っています。また、マイペースを崩さないことも大事です。

Q10. ソロ活動としてコラージュ作品を発表したり、新しい表現方法に常に挑戦されているイメージがあります。guse arsとしての今後の展開について教えてください。

A10. guse arsは、遊び的な要素を大切にしているため「グセ」と「アルス」という架空のアーティストになりきったシリーズでも作品を発表しています。2016年に絵画展を行いました。今年も彫刻展を行う予定です。

どこかの誰かの手から離れ、guse arsを介し、また誰かの手に届く。彼らの作品は、目の前にある対象の前後には見えない物語が常に存在していることを改めて提示し、私たちにそれを想像する有意義な時間を与えてくれるのかもしれない。



PROFILE: guse ars (グセアルス)

東京を拠点に活動する村橋貴博・岩瀬敬美による2人組のアートプロジェクト。海や川に漂着する陶片を採集し、それを創造の種として作品発表、アートワークの提供、デザイン制作などを行っている。ユニット名は、人の行為によって生まれる「癖」、筆くせ、寝ぐせ、口くせからとった言葉「guse」と芸術、技術、手仕事などの意味をもつラテン語の「ars」を組み合わせた造語。村橋貴博はコラージュ、岩瀬敬美はドローイングなどソロワークでの活動も並行して行っている。

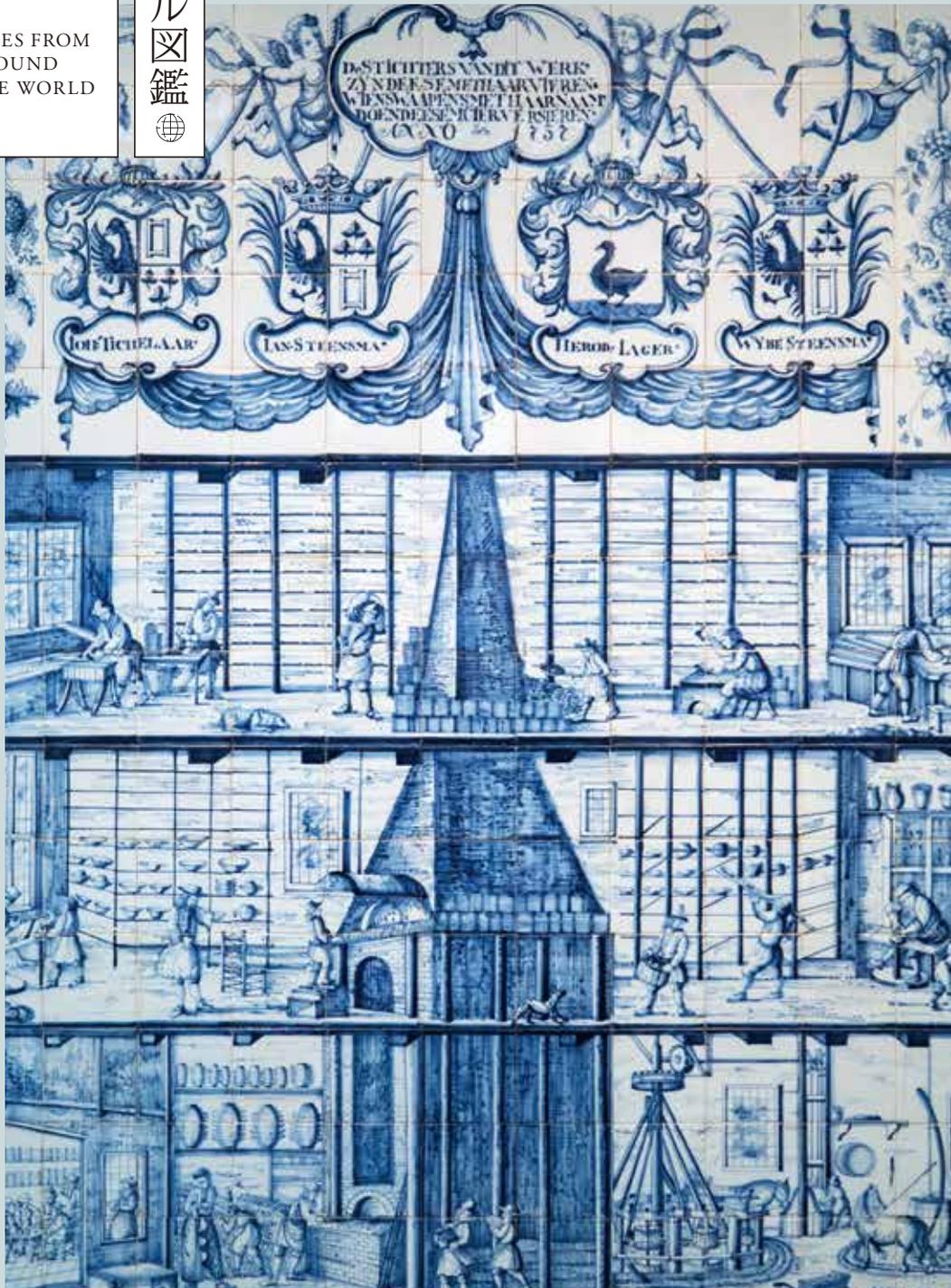


世界の

タイル図鑑

TILES FROM AROUND THE WORLD

INAXライブミュージアム「世界のタイル博物館」には、世界から集められた多種多様なタイルが一堂に。それぞれの国の時代背景や思想、人々の生活が伺えます。



18世紀オランダ陶磁器工房図組タイル(複製)  
オランダ  
154枚組、ティンケラー、1978年、1800×1410×10mm

撮影：小坂圭介



FROM INAX MUSEUMS' COLLECTION

中近東、ヨーロッパ、中国、日本のタイルたち

特記のないものすべて  
撮影：大崎保利



ラスター彩草花文星形タイル  
イラン  
13-14世紀、213×213×15mm



白地多彩色草花文タイル  
トルコ  
16世紀後期、245×245×14mm



白地藍彩草花文家形タイル  
パキスタン  
19世紀、323×272×25mm



多彩草花文手描きタイル  
イギリス  
ウィリアム・ド・モーガン、  
19世紀末-20世紀初、157×157×12mm



多彩花文象嵌タイル  
イギリス  
19世紀、150×150×20mm



藍彩動物文タイル  
オランダ  
17世紀、128×128×12mm



白地青緑彩ザクロ文タイル  
スペイン  
18-19世紀、210×207×19mm



白地多彩人物文タイル  
フランス  
20世紀前半、113×113×7mm 撮影：梶原敏英



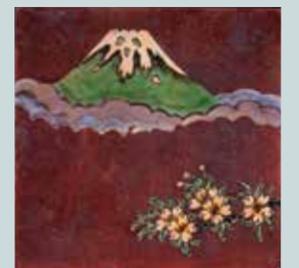
多彩動物草花文タイル  
メキシコ  
20世紀、243×246×18mm



青釉人物文レリーフタイル  
アメリカ  
19世紀末、152×152×12mm 撮影：梶原敏英



赤絵釉上彩陶板「八仙 藍采和」  
中国  
1616-1912年(清時代)、128×128×10mm



赤釉富士図手描きタイル  
日本  
20世紀、152×152×6mm

INAXライブミュージアムでは、これまでタイルにまつわるさまざまな企画展を開催してきました。中でも記憶に鮮明な7つの企画展を振り返ってみました。

タイルにまつわる企画展アーカイブ7選

TILE EXHIBITIONS & ARCHIVES



2016.11.5 - 2017.3.31  
つくるガウディ - 塗る、張る、飾る!  
2017.4.15 - 5.30  
完成!常滑ガウディ

INAXライブミュージアムの10周年を記念した特別展「つくるガウディ」。建築家アントニオ・ガウディへのオマージュ作品をタイルと左官の職人が公開制作。完成後、美しい照明演出とともに作品を披露した。「手でつくる」視点からガウディ建築を新たに読み解こうとした2つの連続企画展。

撮影：梶原敏英



2007.4.14 - 11.10  
水と風と光のタイル  
F・L・ライトがつくった土のデザイン

帝国ホテル旧本館を華麗に飾り、光が透過する柱や、外壁面の水の通り道などを演出したタイルやテラコッタ。当時の製作工場の写真や、現代における復元の試みを展示し、建築素材としてのやきものの魅力を伝えた企画展。

撮影：大崎保利



2013.11.2 - 2014.3.18  
建築の皮膚と体温  
イタリアモダンデザインの父、  
ジオ・ボンティの世界

「イタリアモダンデザインの父」と呼ばれたジオ・ボンティはモダニストでありながら建築表面の表現を重視し、建築に皮膚と体温を与えた。タイムレスな価値をもつその仕事を、図面や直筆のスケッチや、ボンティがデザインしたタイルの再現展示をとおして紹介した。

撮影：梶原敏英



2014.10.4 - 2015.3.15  
壁のパブリックアート

1960年代前後のモザイクタイル壁画に焦点をあて、東郷青児、加藤金一郎らによる壁画の現物や岡本太郎によるモザイクタイル画「太陽の神話」の原画など、おおらかに表現された作品を通して時代の息吹を感じ、タイル壁画の魅力を紹介した。

撮影：大崎保利



2018.11.3 - 2019.4.9  
和製マジョリカタイル  
憧れの連鎖

イギリス製タイルへの憧れから生まれた「和製マジョリカタイル」の世界を、実物のタイル、国内外での建築使用例の写真、さらには空間提案展示「マジョリカタイルの回廊」などをとおして紹介した企画展。

撮影：河合秀尚

タイルにまつわる企画展アーカイブ7選

TILE EXHIBITIONS & ARCHIVES



2014.4.12 - 8.26  
タイルが伝える物語  
図像の謎解き

「世界のタイル博物館」のコレクションから、「物語や教訓、信仰、文化を発信するメディア」という観点で選出したタイルを展示し、そこに描かれた物語やメッセージを紐解いた企画展。

撮影：大崎保利



2016.4.16 - 8.31  
タイルの幾何学  
秩序と無限の模様

イスラーム、スペイン、イギリスなどの幾何学模様のタイルを展示し、それらをとおりて平面を埋め尽くす幾何学模様の面白さを紐解いた企画展。

撮影：大崎保利

# Recommendations from the Museum Shop

今号のテーマ  
—  
タイル

あなたにオススメしたい、  
ミュージアムショップグッズを厳選してご紹介

1 「焼橋展」デザインタイルコースター ¥1,573(税込)

大竹伸朗作品を転写したデザインタイル。INAXライブミュージアムで開催された「焼橋展」の展示会グッズ。

2 「ニュータイル/常滑」大竹伸朗 デザインTシャツ ¥3,850(税込)

大竹伸朗の代名詞的なタイポグラフィで表現されたニュータイル/常滑Tシャツ。カラーは白・黒あり。

3 レーススタイルクロック ¥4,950(税込)

レース模様の雰囲気が美しいタイルを用いた置時計。写真のブルーのほか、全4色展開。

4 タイルウッドクロック ¥7,700(税込)

釉薬の色と質感にこだわった陶器の置き時計。ひとつひとつ手作りのため形も色味も個体差あり。

5 クレイベグマグカップ ¥1,100(税込)

タイルの原点とも言われるメソポタミア文明の粘土装飾「クレイベグ」をモチーフにしたオリジナルデザイン。

6 タイルコレクション オリジナルマグネットタイル ¥330(税込)

「世界のタイル博物館」収蔵タイルコレクションの図案を写したタイルマグネット(5cm角)。

7 STORY TILES ¥4,510(税込)

16世紀から続く伝統的なオランダタイルに現代の感覚を移したアートタイル(10cm角)。

8 オリジナル手ぬぐい オランダタイル柄 ¥1,320(税込)

16世紀オランダの風物を描いたデルフトタイルをモチーフに取り入れた、「代官山かまわぬ」製・注染手ぬぐい。



Shop Information

INAXライブミュージアム館内にあるショップ。展示にまつわるグッズから、関連書籍まで幅広くご用意しています。オンラインショップもあり。



タイルコレクション メモパッド ¥314(税込)

「世界のタイル博物館」に収蔵されているタイルコレクションの図案を写したメモパッド。

『世界のタイル・日本のタイル』(編:世界のタイル博物館) ¥1,980(税込)

「世界のタイル博物館」収蔵品カタログ。古代オリエントから、イスラーム、ヨーロッパ、中国、日本まで多彩なタイルの数々を収録。

ジオ・ボンティ ミニチュアタイル コンプリートセット ¥6,380(税込)

イタリアモダンデザインの巨匠・ジオ・ボンティのデザインタイルセット(全8種+サインタイル)。デザインブック付。

100collection ポストカード ¥132(税込)

「世界のタイル博物館」収蔵タイルコレクションの図案を写したポストカード。

復元「禁煙」タイル / 復元「ヴィクトリアン」タイル ¥5,500(税込) / ¥2,200(税込)

実際に使用されていた古い国産タイルと、19世紀の英国タイルをLIXILやきもの工房で復元(15cm角)。

WASHED PATTERN TILE ¥1,650(税込)

陶片を組み合わせて新たなパターンを創生するユニット「guse ars」によるアートタイル(10cm角)。

タイル図案マウスパッド ¥990(税込)

「世界のタイル博物館」収蔵タイルコレクションの図案をモチーフにしたオリジナルデザイン。

タイルソーブ ¥1,650(税込)

アズレージョと呼ばれるポルトガルタイルの図案をパッケージにしたフレグランスソーブ。ポルトガル製、タイルチャーム付。

# REPORT INAX MUSEUMS

昨年開催されたイベントを振り返る。

# 2

## 東京2020パラリンピック 聖火セレブレーション



2021年8月14日、INAXライブミュージアムにて「パラリンピック聖火セレブレーション 常滑市集火式・採火式」(主催:常滑市、共催:LIXIL)が行われました。そこで披露されたのがデザイナー、吉岡徳仁さんによる「桜の集火台」。完成前の6月に市の体育館で、集火台制作のため、多様性について学んだ小学生と障がい者が桜の花を模したやきものに釉薬を塗るというワークショップが開催されました。当日、完成した159枚のやきもの花びらをまとった集火台で常滑の火がひとつになり、その火は愛知県へ採火され、東京2020パラリンピックの聖火へとつながりました。



体育館でのワークショップの様子



新市庁舎の歩行者デッキ(下)とその壁を飾るスクラッチタイル(上)

## 1 甦れ!!「黄色い煉瓦」 ～みんなのでつくる新庁舎～に協力

常滑市の新市庁舎が2021年12月4日に竣工。新市庁舎の歩行者デッキ壁面に飾る「スクラッチタイル」を市民が制作する企画に協力しました。帝国ホテル旧本館(1923年、フランク・ロイド・ライト設計)のために常滑で作られた「黄色い煉瓦」を蘇らせようと市が主催。20年12月から翌年1月にかけて、当館の「土・どろんこ館」企画展示室を会場に1640名の老若男女がこのスクラッチタイルづくりに参加しました。焼成前のタイルはLIXILやきもの工房が用意し、当館からは会場提供の他、講師や現場スタッフとして市役所のメンバーと協働しました。現在、歩行者デッキでは市民の思いが込められた「黄色い煉瓦」に出会うことができます。



2点とも撮影:加藤弘一

スクラッチタイルづくりの様子

# 3

## 滑らかな粘土の床が、丘陵に広がる舞台の上で NEW TRADITIONAL展 in 常滑

奈良の一般財団法人たんぼほの家によるプロジェクト「NEW TRADITIONAL 伝統工芸と障害のある人の表現の相互発展」が常滑にやってきました。※ その会場となったのが当館です。いくつかのイベントが開催されました。デザイナーの高橋孝治さんがディレクションした展覧会「わたしのニュートラ」(会期:1/22～31)では、ワークセンターかじまと常滑のつくり手が協同し、土を用いて染布や紙への漉き込み、新しいタイルの制作をし、それらを展示。どろんこ広場では会期中に「土器焼き」を行いました。穴を掘り、ドーム状の粘土の屋根を被せた中で焼成する、煙が少なく安全な、原初的なやきものつくりです。「ニュートラ談義」と題したトークも開催され、たんぼほの家のコンセプトを見学者、参加者ともに体験できた機会でした。

※本事業は令和2年度 文化庁委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)」により実施されました。



会場風景



「土器焼き」の様子

## 新規プロジェクト「土どろEXPO2021」を掲げ、 体験や学びをとおして 土の魅力を再発見する企画を開催



「陶土染め体験 ～やきものの土で染めてみよう!～」土について学ぶトークとセットになったバッグづくりのワークショップ(5/15、10/19開催)。講師は、常滑市陶業陶芸振興事業推進コーディネーターを務めていたこともあるデザイナーの高橋孝治さんです。参加者は、土を砕く・ふるう・する・染めるの4工程にチャレンジ。一心不乱の格闘後、土で染めたとは思えないほどの発色と柔らかな風合いに参加者の顔がほころびました。

## 「光るどろんどろんご広場」Instagram 投稿キャンペーン実施

「光るどろんどろんごキット」を購入し、つくり、完成品を撮影して投稿していただくキャンペーンを初めて開催(応募期間7/8-9/30)。100件近くの投稿があり、その中から、土絵作家の三木よきさんに傑作10点を選んでいただきました。「インスタグラムならではの映える写真も沢山届き、見ているだけで楽しくなりました。」と好評。三木さんにはこれまでも当館主催の「光るどろんどろんご全国大会」などで審査員長を務めていただきました。

3点とも撮影:河合秀尚



Dreaming  
(今回の「光るどろんどろんご傑作集」より)  
画像提供:投稿者

3点とも撮影:河合秀尚

企画展

DISCONNECT / CONNECT

【ASAO TOKOLO × NOIZ】

幾何学紋様の律動、タイリングの宇宙

Rhythms of Geometric Patterning : A Cosmos of Tiling

2021.4.24(土) — 10.12(火)

「土・どろんこ館」企画展示室

REPORT

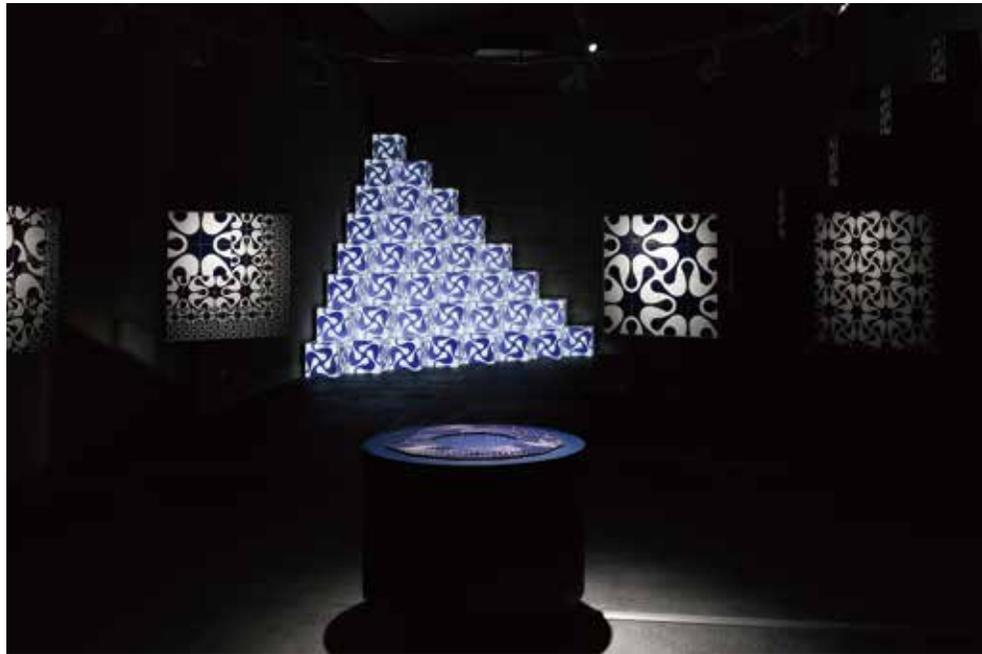
INAX

2021

MUSEUMS

昨年開催されたイベントを振り返る。

REPORT 05 24 APR. - 12 OCT.



撮影:河合秀尚



DISCONNECT/CONNECT  
[ASAO TOKOLO × NOIZ] 幾何学紋様の律動、タイリングの宇宙  
RHYTHMS OF GEOMETRIC PATTERNING: A COSMOS OF TILING  
2021.04.24(SAT)-10.12(TUE)



撮影:河合秀尚



撮影:梶原敬英

昨年開催されたイベントを振り返る。

REPORT 05 24 APR. - 12 OCT.

本展は東京2020オリンピック・パラリンピックのエンブレムをデザインした美術家の野老朝雄さんと「コンピューショナル・デザイン」の分野で建築界をリードするnoizの両者が共同した展覧会でした。野老さんが創作する幾何学紋様がタイルに焼きつけられ、物質となった紋様の世界をnoizが映像や音楽を織り交ぜた豊かな体感空間へと昇華させました。

会期初日には野老朝雄さんと豊田啓介さん(noiz)によるオンライントークを開催しました。野老さんからはシンプルな図形から群をつくる野老紋様の制作過程をご披露いただき、豊田さんからはタイルというモノと映像と音という情報による展示コンセプトが語られました。展覧会場にもカメラが入り、映像を通して作品も楽しんでいただけただけのトークとなりました。

9月11日は、講師に野老朝雄さんと、数学者で敷きつめ模様の数理を専門とする荒木義明さんをお迎えし、ワークショップ「かたちのふしぎ ひし形パズルで紋様づくり」を対面とオンラインの2回開催しました。野老さんの作品をもとに作られた「ひし形パズル」を使って、子どもから大人まで幅広い参加者が図形の仕組みを楽しみながら学びました。

主催：INAXライブミュージアム 監修：野老朝雄、noiz  
紋様制作：野老朝雄 展示デザイン：noiz ヴィジュアルプログラミング：白木 良  
音楽：原摩利彦 会場グラフィック：小木央理 タイル制作：LIXILやきもの工房  
協力：ニチレイマグネット株式会社

撮影:梶原敬英



撮影:河合秀尚

ワークショップ(9/11)の様子。  
写真上、左)野老朝雄さん、右)荒木義明さん



撮影:梶原敬英

オンライントークの様子。右から、野老朝雄さん、  
豊田啓介氏さん、後藤泰男(当館主任学芸員)





企画展

## 壮観！ナゴヤ・モザイク壁画時代 Spectacular! Nagoya's Golden Era of Mosaic

2021.11.6(土) — 2022.3.22 (火)

「土・どろんこ館」企画展示室

# 6

REPORT  
INAX  
MUSEUMS  
2021



建築家・村野藤吾が手がけた旧丸栄百貨店本館外壁、画家・矢橋六郎による愛知県庁西庁舎ロビー、画家・北川民次による建築と一体となった瀬戸市立図書館の壁画…。高度経済成長期、名古屋とその周辺ではさまざまなモザイク壁画による装飾文化が華ひらきました。本展では、1950年代後半から70年代にかけて、ナゴヤのモザイク壁画黄金期につくられた珠玉の17事例を、掘り下ろしを中心とした写真と迫力の実物資料で紹介していきます。旧ホテルナゴヤキャッスルと旧カゴメビルのプロビエの壁画(いずれも部分)は近年当館が収蔵した実物資料で当館では初披露。会場モザイクも含め、豊かなモザイクの世界へと来場者を誘っています。

2022年1月29日には、関連イベントとしてトーク「ナゴヤのモザイク壁画めぐり 見つけて見つけて魅力再発見」

を開催しました。名古屋市内を中心にモザイク壁画を巡るツアーの企画やガイドをされているモザイク愛好家の森上千穂さんに講師を務めていただきました。ご自身が行脚して取材してきた名古屋、さらに県外のモザイク壁画を豊富な写真と共に紹介し、それらの魅力について語っていただきました。



IN STORE NOW  
展覧会関連冊子も絶賛発売中。(全面カラー／34ページ／税込550円) 17事例を掘り下ろし写真を中心にしたカラー図版多数掲載。当館ミュージアムショップ、LIXIL公式オンラインショップで購入可。

主催：INAXライオンミュージアム  
企画：INAXライオンミュージアム企画委員会  
展示協力：カゴメテクノス株式会社、中部日本ビルヂング株式会社、株式会社ナゴヤキャッスル、株式会社丸栄、株式会社ナゴヤテクノス、株式会社田代明彦 / 会場ボランティア：kohho inc.



撮影：河合秀純

昨年開催されたイベントを振り返る。

REPORT 06 6 NOV. - 22 MAY 2022

昨年開催されたイベントを振り返る。

REPORT 06 6 NOV. - 22 MAY 2022